

「2024年度香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科 修士課程1年 石川 琢

今回の香港中文大学サマープログラムは大変貴重な経験となった。中文大学で教えられる中国語のカリキュラムは、午前の読み書きと午後の会話とで繋がっている。似たような単語や表現を使いながら別々のテキストが用意されているため、内容が身につけやすくなっていた。先生も同じ内容を別の仕方でも繰り返し説明したり、受講者に発言の機会を沢山与え、質問にも親切に対応していただいた。

中国語の学習だけでなく国際理解としても良い機会となった。同部屋のスウェーデン人とは慣れない英語・中国語でコミュニケーションをとりながら、互いの生活リズムを調節したり、くだらないことで笑い合ったりした。香港の街中やマカオなど学外に繰り出す時間もあり、経済活動の様子や文化の違いを実感した。私が再確認したのは、日本の接客がいかに丁寧すぎるかということである。日本の店員は挨拶や商品の名前、ポイントカードの有無などたくさんの発話があり、それにより客との摩擦を無くそうとしているが、香港の店員は日本と比較すると発話も少なく、良い意味でぶっきらぼうに見えた。香港に限った話ではないが、日本に比べると海外の接客は大雑把で、日本のサービス業の過度な丁寧さが浮かび上がる。こうした日本社会の在り方を考える点で、香港での生活は非常に有意義なものとなった。

香港人や外国人だけでなく、京大の学生と知り合える点も非常に大きい。今回のプログラムに集まったのは、専門分野も回生も異なる様々な学生で、ただ授業を受けたりサークルに入るだけでは知り合えなかった仲間たちであった。普段は自分と興味や回生が近い人同士で関わることが多いが、このプログラムに集まったのは、中国語を学びたい、香港へ足を踏み入れたいという気持ちを持つ人々であった。だからこそ自分とは異なる分野、異なる回生の人と出会い、それぞれの興味や抱えている問題などを話し合うことができ、あらゆる面で刺激を受けた。

香港の街中には日系のチェーン店が進出し、日本の商品も沢山売られていた。中文大学では日本車が走っているのをよく見かけた。また大澳という漁村地区では、ボートのエンジンに日本のメーカーのものを使っている人もいた。グローバル人材という言葉も陳腐化しているが、私は実体のないものを膨らませて利益を得るよりも、人々の生活を着実に豊かにするために理想と現実の落としどころをひねり出す、そのような仕事がしたいと感じた。また、私は趣味で音楽制作を行っているが、そちらの方面では、いかに既存のものを組み合わせて新しいものを生み出すかや、SNS が世界の若者を席卷するなかで共有しづらくなった自分独自の性質をどのように解放するか、などを考えて作品を作りたいと感じた。